印刷業界の新技術情報を三美印刷がお届けするメールニュース

sanbi-i-com (No.189)

オーディオブック（2）

車か電車か

日米のオーディオブックの市場規模に大きな差がある理由については様々な見解がありますが、中でもよく目にするのが「米国の通勤は自動車。日本は電車。この違いが原因」とする説です。

1. 日本でも自動車通勤者の方が多い

車か電車かの違いが原因だとする考えを通勤手段説と呼ぶことにします。この説は前回の sanbi-i-com でも簡単にご紹介しましたが、再掲します。

“米国の通勤は自動車なので、ハンズフリーのオーディオブックを車中で聞く文化が定着した。日本は電車が主なので普及していない。

（筆者注）日本でも電車が主なのは大都市圏だけなので、この説では地方の説明ができません。”

この（筆者注）に対して、社内からですが、以下のような内容の質問、意見がありました。

「地方では車が主でも、全国合計ではどうなのか？おそらく電車の方が多いと思うが、だとすれば、日米の差は通勤手段説で概ね説明できていると思う」

そこで今回は、通勤手段説の妥当性を、前回よりも詳しく見てまいります。

＜全国では車と電車のどちらが主なのか？＞

以下のリンク先の PDF は、平成 22 年（2010 年）の総務省統計局による国勢調査の結果です。2010 年では古いと思われるかもしれませんが、その後コロナによる通勤者数の減少はあったとしても、車と電車の比率が大きく変わった（どちらかが大幅に増えた／減った）といった類の話は聞いたことがないので、大勢は変わっていないと見て差し支えないと思います。PDF の p.3 に、通勤者・通学者の利用交通手段の割合（%）を示す県別の表が載っています。

https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/final/pdf/01-11_5.pdf

全国の数字（%）は下表の通りです。参考用に車（自家用車）の利用割合が 9.4%で最も低い東京と 77.6%で最も高い山形も表に加えておきます。

手段数	通勤手段	全国	東京	山形
1 種類	徒歩	7.1	8.6	5.7
	電車	16.1	44.5	1.9
	バス	2.5	2.5	0.9
	自家用車	46.5	9.4	77.6
	バイク or 自転車	14.6	16.5	9.3
	他（不明）	1.8	1.3	1.4
2 種類	電車＋バス	3.8	7.3	0.1
	電車＋バイク or 自転車	3.4	5.8	1.0
	他（不明）	3.1	2.5	1.8
3 種類	―（不明）	1.1	1.5	0.3
	計	100.0	100.0	100.0

見ての通り、46.5%の人が車を利用しています。表の緑色の所です。

一方、電車は表の黄色の所を足し算すると 16.1 + 3.8 + 3.4 = 23.3% です。電車は車の半分（46.5 に対し 23.3）の人しか利用していないということです。通勤手段説の前提である**「日本は電車が主」は誤りであり、実は自動車通勤者の方がずっと多い**のです。

2. 通勤手段別／利用可能書籍の〇×表

書籍を「読む」には目と手を使う必要があり、「聞く」には耳を使う必要があります。

通勤手段	目と手 フリーか	耳 フリーか	紙書籍 電子書籍	オーディオ ブック
＜運転あり＞ 自動車など	×	〇	×	〇
徒歩	×(※)	〇	×(※)	〇
＜運転なし＞ 電車など	〇	〇	〇	〇

＜自分で運転する通勤手段の場合＞

自動車、バイク、自転車が該当します。目は周囲の交通の状況を注意して見なければならず、手はハンドル等を操作しなければなりません。目と手が塞がった(アイズフリー、ハンズフリーではない)状態となり、紙であれ電子であれ、書籍を読むことはできません。しかし、耳は塞がっていないので、オーディオブックを聞くことはできます。よって、**書籍の選択肢はオーディオブックのみとなります。**

＜自分で運転しない通勤手段の場合＞

電車、バスが該当します。目と手、耳は全てフリーなので、「読む」「聞く」の両方、**即ち紙／電子書籍、オーディオブックのどれでも利用可能です。**

※徒歩の「目と手」と「紙書籍・電子書籍」の×について

徒歩では車、バイク、自転車ほどのスピードは出ませんが、それでも何かを読むのは危険です(歩きスマホが原因の交通事故が多発しています)。歩きスマホは街中にあふれているのが実情ですが、ここは×としました。

ちなみに小学校によくある二宮金次郎像は歩きながら読書しており、勤勉の象徴として称賛されてきましたが、安全に読むことができたのは自動車も電車もない江戸時代だったからです。現代では危険な行為です。

3. 日本の通勤者の 7 割はオーディオブックが唯一の選択肢

前項の「運転あり: 書籍はオーディオブックに限定」か「運転なし: 全ての書籍が利用可能」かの分け方を第1項の統計表に当てはめてみます。

手段数	通勤手段	全国	東京	山形
1 種類	徒歩	7.1	8.6	5.7
	電車	16.1	44.5	1.9
	バス	2.5	2.5	0.9
	自家用車	46.5	9.4	77.6
	バイク or 自転車	14.6	16.5	9.3
	他(不明)	1.8	1.3	1.4
2 種類	電車＋バス	3.8	7.3	0.1
	電車＋バイク or 自転車	3.4	5.8	1.0
	他(不明)	3.1	2.5	1.8
3 種類	—(不明)	1.1	1.5	0.3
	計	100.0	100.0	100.0

運転ありを緑、なしを黄色に塗ります。徒歩も安全性の点から「聞く」書籍に限るべきですので、緑に分類します。緑は 46.5 + 14.6 + 7.1 = 68.2%となります。

「電車＋バイク or 自転車」は、運転を行う場面もありますが、便宜上黄色に分類します。黄色は 16.1 + 2.5 + 3.8 + 3.4 = 25.8%となります。

以上を言い換えますと;

- **日本の通勤者の約 7 割(68.2%)は、通勤時に利用できる書籍がオーディオブックに限られる。**
- **日本で通勤時に本を「読める」人は 4 人に 1 人(25.8%)しかいない。**

4. 米国でオーディオブックが最もよく聞かれている場所は、車ではなく家

通勤手段説には、もうひとつ良くない点があります。オーディオブックを聞くのは通勤時だけとの思い込みを招きがちなことです。米国の業界団体 APA (Audio Publishers Association)の発表によれば、オーディオブックを最もよく聞いた場所は、2019 年は車が 41%、家が 43%で、コロナの影響で通勤が減った 2020 年は車が 30%、家が 55%と差が広がりました。家事の最中など、手が塞がっている時によく聞かれているようです。「車か電車か」だけで日米の差を説明しようとする通勤手段説は、日本と米国の両方の現状を誤認しているというのが今回の結論です。

以上

(第 189 回: 2022 年 3 月 23 日)